師匠と一夜

【夢男主ルート】子供たちの沈黙　後日談１

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18912464

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 夢男主, 夢男主×霊幻, 男性妊娠

リクエストいただきました、みーくんルートの後日談の１話目です。夢男主です。（https://pictbland.net/items/detail/1946246 ）←にて名前を変換して夢小説として非会員でも読めます。ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の後日談にあたります。師匠の子供がしゃべります。なおモブくん、エクボ、芹沢の倫理観が少しアレとなっております。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〰！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

【夢男主ルート】子供たちの沈黙　後日談１

何となく芹沢の顔を見るのが辛くて、子供たちを連れてよく公園に出るようになった。
大きくなってきたお腹をさすりながら、一緒に砂遊びをする長男と次男を眺める。
「霊幻さん……っ」
切羽詰まった声に振り返ると、森羅と同じような法衣に身を包んだみーくんがいた。
「やっと準備が整いました。逃げましょう！！」
逃げ、る？
何故だろう。
そんなこと、考えたこともなかった。
長男と次男が異変を察知して俺の足元に近づいてきて、マタニティズボンをぎゅっと握りしめる。
「子供達も連れて、早く！霊幻さんを監禁してる３人はもはやヒトではありません。みんな危険だ」
そう言うみーくんに戸惑う。
「みーくん。俺のお腹の中には、３人目がいる。すでに能力者であることは分かってる。この子の安全は？」
それに。
「ダンナの居ぬ間に間男きたりて嫁攫い、ってか。おい若造、俺様に喧嘩売るとは、今度は命が惜しくないとみえる」
タバコから戻ってきたエクボが俺の腰を抱き寄せながら目を緑に光らせる。
「……っ、今度こそ霊幻さんを助けるって決めたんだ……！！」
じゃららら、と水晶で出来た呪具をみーくんが構える。
「オンっ！！」
左手でお札を６枚取り出し、エクボに向かって投げる。
「ベイシラ、マンダヤ、ソワカ！！」
「ぎゃあああああっ！！」
びたりとお札がエクボに張り付き、お札の周りから煙が上がってい

る。
「おとうさん」
次男が心配そうにエクボを見ている。
「やってくれたなぁ……！！小僧、俺様に本気で勝てると思ってんのかぁ……！？……大丈夫だ、永崇」
エクボが優しく次男の頭を撫でる。
「思ってないさ。オンベイシラマンダヤソワカっ！！」
「ぐあああああああっ！！」
エクボがもがき苦しむ。
「アンタみたいな上級悪霊には足止めが関の山だ。オンベイシラマンダヤソワカ！！……っさあ、今のうちに！霊幻さん！！お腹の子の安全も、今なら保証できますから！！」
今なら、逃げられる？
フラフラと俺はみーくんの手を取る。
みーくんが長男と次男を抱き上げた。
「ばいばい、お父さん」
意外なことに永崇がにこやかに手を振っていて。
「お母さん、僕の」
にこやかに言う次男の言葉の意味は、よく分からなかった。
「……早ぇ反抗期じゃねぇか、永崇？」
エクボの足元にお札が焼け落ちていく。
「みーくん──！」
「『潰れろ』」
上級悪霊の言霊一言。お守りらしい数珠を構えるみーくんの手を永崇が抑えて、
「『犬』、『狐』」
手から悪霊を召喚した。
永崇が召喚した黒い影はエクボの攻撃を薙ぎ払い、エクボに向かっていく。
「お父さん1人で良かった。お父さん達が揃ってたら難しかった。『鼠』『猫』」
永崇の両手から夥しい数の鼠のような影がエクボに向かっていく。
「ぐあっ！？永崇てめぇ！！」

「霊幻さん、早く、こっちへ！」
『日輪霊能連合会』とラッピングされた黒い９人乗りバンに乗り込む。
中にはすでにぶつぶつと呪文を唱えているみーくんと同じ法衣を着た霊能力者が4人乗り込んでいる。
「飛ばします。隠れ里まで急ぐので」
運転手に言われて慌ててシートベルトを子供達につけさせ、自分も付ける。
「くらませ、くらませ、くらませ、くらませ、」
能力者達は数珠をジャラジャラ言わせながら、よく聞くとそんな言葉を呟いていた。
「「……クラマセ、クラマセ、」」
子供達も呟き始めた。
「くらませ、くらま……ぐっ！？」
霊能力者の１人が血を吐いて倒れた。
「追ってきてる。急ぎましょう。大丈夫ですよ霊幻さん、彼は次の交代場で代わりを入れて病院に行かせます」
車内は常にピリピリしていた。
「美築（※みーくんのこと）様、東支部で補充しますか？」
「ああ」
ドライバーがみーくんに伺いをたてる。
ドライバーは慌ただしくハンドルを切って、『日輪霊能連合会支部』と書かれた建物に入っていった。
「美築先生、代わりの者はここに」
「座席に座って唱えてくれ。追っ手はずっとこちらを探している。急ぐぞ」
どうやら組織の中で偉くなってるらしい。……みーくんカッコいいな。感慨深い。
「これから長いドライブになります。必要なものはありますか？」
「飲みものと、食料……それとトイレに行かせて欲しい」
俺がそう言うと、みーくんが考え込む。
「なるべく携帯トイレにお願いします。出発しましょう」
まじかー。

また霊能力者が１人倒れたのを見て、慌てて車に乗り込む。
「美築様、一体どのような怪異に追われているのですか？」
「……さあ。上級悪霊一体は確認したけど。霊幻さん、霊幻さんのストーカーって何なの？」
車の中でする雑談が物騒だ。
「……多分世界最強の超能力者と、世界で多分５本の指に入る超能力者」
ひいっと運転手が悲鳴を上げる。
「うわ〜、マジ？」
「マジだ」
「どうりでさっきからそこそこの霊能力者集めてるのにバタバタ倒れるはずだよ。これ、あとで浄堂様に怒られるなぁ……ま、いっか」
みーくんはあっけらかんとしている。
「この世界、痛い目に遭うのも修行のウチだしね。森羅先生に言ったら怒られそうだけど」
「……森羅に会ったのか！？」
ん？と助手席からみーくんが振り返る。
「会ったも何も、俺の最初のお師匠様だよ。霊幻さんの知り合いなんでしょ？乱暴されたかも、って話したら、すげー心配して、俺を弟子にしてくれたよ。上手いこと隠れ里に行けたら、お礼しないとなぁ」
「……そうか、森羅が」
ありがたさに涙が出そうになる。
「さ、霊幻さんたちは寝てていいよ。子供達も。俺たちは目くらましを続けてるから」
「おまえたちじゃちからぶそくだ」
次男が言う。
「こら、永崇！」
「あはは、半霊半人の子か。たしかに凄い霊力だね。君に言われちゃ形なしだけど、ここはお兄さんたちに任せてくれないかな。君の人としての身体にあまり疲労を溜めると、走って逃げなきゃいけない時に困るからね」

「……いいだろう」
そう言って永崇はすうすうと眠り出す。みると、長男の茂隆はとうの昔に寝ていた。
「すまん、俺も……」
疲れが出てきて、身重の体にはつらい。眠って起きると、次は車ごと船に乗るところだった。
「──能力者達は空を飛べる！海は危険だ」
「大丈夫。海の女神に力を借ります。このお守りを素肌に身に付けてください」
みーくんから渡された深い藍色のお守りを素肌に身に付ける。
「僕が持つと燃えそうになるんだけど」
永崇が煩わしそうにみーくんにお守りを差し出す。
「あらら。追加のまじないをかけるから、ちょっと待ってて」
ぶわ、とみーくんの身体から青い光が溢れて、
「『霊幻永崇』」
お守りの中に収束していく。
「これで使えると思うよ」
「うん」
永崇もお守りを身に付ける。
力を使うみーくんをありがたそうに日輪の霊能力者達が拝んでるのが、ちょっと異様だった。

「おええ……」
俺だけ船でめちゃくちゃ酔った。
「霊幻さん妊娠してるから、女だと思われて海の女神に嫌われちゃったかな」
苦笑しながらみーくんが水の入ったペットボトルを差し出してくれる。
「移動し続けてるから、追っ手も後手後手に回ってくれてるけど……隠れ里に向かうところがネックかなあ」
夜空が美しい。
ちょっとヘンテコな日輪の法衣も、みーくんが着てると様になっていて。

「もうちょっと応援頼むしか無いか……ん？どしたの」
「……何でもないよ」
「……俺に見惚れてた？」
「自意識過剰」
「それでメシ食ってたんだもん。自分の価値は知ってるよ。……
ね、霊幻さん。……キスしていい？」
髪を耳にかけながら唇を湿らせて顔を近づけてくるみーくんに喉が
鳴る。
「シたくなるから、駄目だ」
「何それ、めっちゃエロい妊夫じゃん」
「……俺、セックス依存症なんだ。あいつらに治療の邪魔されて
て、発作みたいにしたくなる。……それにみーくんを巻き込みたく
ない」
「……何か、俺に手伝えることない？」
そうだな……と唇に手を当てて考え込む。
「セックス依存症を診れる医者を紹介して貰えると嬉しい」
「分かった。大丈夫だと思う。……ねぇ、気持ちよくしないから、
抱きしめていい？」
「どうした？」
「安心したいんだよ」
まあ、それぐらいなら……。
俺は手を開いてみーくんを受け入れる。
力強く、でも俺の腹に障らないように、みーくんはぎゅっと抱きし
めてきた。
「……霊幻さんが生きてて良かった……」
ずび、と鼻を啜る音が聞こえてくる。
「男前が台無しだぞ」
「誰のせいだと思ってんの」
「……ちょっと、困惑してる」
「お酒盛られるのを防げなくて、それから裁判まで連絡取れなく
て、俺がどんだけ心配したと……後悔したと思ってんの」
「心配かけたな」
「それだけじゃないよ。ずっと会いたかった。……意味分かってく

れるよね？」
戸惑う。
「みーくん、気持ちは嬉しいが……」
「気持ち？ほんとに俺の気持ち分かってくれてる？」
思わず黙り込む。離れてからのみーくんを知っている訳ではない。
「俺が霊幻さんに本気になったのって、霊幻さんが俺を中学に入れようと動いてくれた時からなんだ。かっけー、って思った。スゲェ大人だな、って憧れて、尊敬した」
「……うん」
「それからこともなげにかあちゃんを入院させてくれて。本当に凄いと思ったよ。かなわないな、って」
「そう言う仕事に慣れてるだけだよ」
「それがスゲェんだって。霊幻さんは根本的に物事を解決させる力を持ってる。俺も修行しながら中学行って、高校も行ったけど、霊幻さんと同じことをしようとしたらまだできる気がしない。霊能力を幹部になれるほど鍛えても、霊幻さん１人助けられなかったし」
「……俺は、そんなに凄い人間じゃないよ」
「凄い人だよ。本当に、心から尊敬してる。ただのチンピラとして終わるはずだった俺が、日輪の幹部としてここに立ってるのが証拠だ」
「凄いじゃないか。頑張ったんだな」
頭を撫でると、みーくんの顔が赤くなっていく。
「マジで！血のションベンが出るような修行したんだって！……霊幻さんに釣り合うような男になれるように」
「そんな。みーくんは俺には勿体無いよ」
「そう思うの？じゃあお得じゃん。俺貰ってよ」
ああ言えば、こう言う。そろそろ困ってきた。
「みーくん……俺は、みーくんをパートナーの対象としては見ていない。諦めてくれ」
「諦めない」
みーくんがじっと俺を見つめてくる。居た堪れない。
「いつか必ず、霊幻さんに認めてもらうから」
「みーくんには俺よりもっといい人がいるって」

「そんな定型文で断られても納得できない」
「俺、父親の違う子供を３人も育ててるんだぞ！？しかも親子ほどもみーくんとは年が離れてる。こんなおっさんなんか……やめておけよ……」
はーっ、と大きくみーくんがため息をつく。
「霊幻さん、霊幻さんが子持ちでおじさんなのをマイナス１００点とするよね？」
「お、おう」
「でも子持ちだからって遠慮する霊幻さんは母性を感じてプラス５０点だし、年が離れてるって気にするのも恥じらいがあってプラス５０点で、おじさんなことを気にしてる清潔感あるイケオジってもうプラス１００点なんだよね」
「はぁ？」
「だから総合してプラス１００点だから、問題ないかな」
「いやほんと何言ってんのみーくん」
「とにかく霊幻さんは魅力的ってこと」
かあああと顔が赤くなってくる。
「……もう、寝る！」
「うん。おやすみ、霊幻さん」
ちゅ、と頭に口付けてくるみーくん。
「〰〰〰っ」
こ、これは……。
参ったな……。

※

早朝に車ごと石垣島の船着き場に降りる。
「『×××××』」
みーくんが何か言いながら全員分のお守りを青い霊力の炎で燃やす。
「さ、隠れ里までもうすぐだから。頑張って」
なんだかんだ決して快適とは言えない移動手段で、沖縄まで連れてこられて、美しい景色を楽しむ余裕なんてないほど俺も子供達も疲

労が溜まっていた。
車で眠ったり起きたりを繰り返しながら、ただひたすらモブ達に追いつかれないよう祈る。
「――見えました。霊峰、於茂登岳です」
窓からなだらかな山が見える。

「……来てるよ」

す、と半月型の目を開けて、長男の茂隆がつぶやいた。
「――っ、飛ばして！」
みーくんが叫ぶ。
「入り口が見えたっ、もう少し……！！」
「「「「がはぁっ！」」」」
目くらましの呪文を唱えていた霊能力者達が一斉に血を吐いて倒れ、
ドンッ！！！！
とバンが横殴りに弾き飛ばされた。
「う……っ！」
思わず腹を守ろうと手を回す。
ギャリギャリと横転して滑っていくバンの中は洗濯機のように揺さぶられて。
ようやく止まった時には。
長男の茂隆が、バリアの泡で人々を守っていた。
「『犬』、『狐』」
次男の永崇が歪んで開かなくなったドアを使役する悪霊で弾き飛ばす。
そこから俺たちはふわふわとバリアの泡で外に避難させて貰った。
「おかあさんがいるのに車を攻撃するなんて、何考えてるの」
俺たちにバリアを張ったまま、茂隆が宙に浮かぶモブに怒りの声を上げる。
「茂隆がいるんだから、師匠は安全でしょう？」
こともなげにモブが返す。
宙に浮かぶモブ、エクボ、芹沢が手をかざして。

「邪魔者には黙っててもらおうか」
キィ、と能力を溜める音がする。
「……！俺以外にバリアを張ってくれ、茂隆！俺には攻撃してこないはず……っ」
「ダメ。足だけねらうかのうせいがある」
茂隆のバリアだと、あの３人の攻撃に耐えられるかどうか分からない。
「……っ、俺も札全部使って結界張ります！」
みーくんが法衣からバラっと札を取り出して、３人に向かって構える。
それでも。それでもあの３人には……。

はた、と気がつく。
山の中に見える、左右に石を積まれた道。その奥にある灯籠。その先には山しか見えないが、あれが隠れ里の「入り口」じゃないだろうか？
俺は子供達とみーくん、霊能力者達の靴を奪って、
一目散に里に向かって走り出した。
「「えっ？」」
敵味方双方が俺の行動に困惑する。
１人、エクボだけが。
「まさか、駆け込み寺か──！？」
俺と同じ事に気がついた。
もし、日輪の隠れ里が「駆け込み寺」的な特性を有しているのなら。
「止めろお前ら！霊幻を止めろ！！」
超能力の縄が伸びてきて足に絡みつく。
俺は膝をつきながらも、全員の靴を灯籠の向こうに投げた。

どおん、と遠くから太鼓の音が鳴って。

『『駆け込み成就〜！！』』

ふっ、と俺たちは見知らぬ村に転送された。

※駆け込み寺とは
主に離縁するために女性が逃げ込むことのできる寺。夫やその家族に離縁を引き止められ寺の前で引き戻そうとする争いが起きること

が常だが、女性の持ち物、例えば草履を寺の中に投げ込む事ができれば「駆け込み成就」となり寺の者が女性を保護する事ができた。

続